

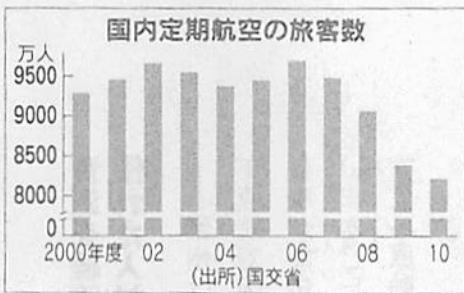


早稲田大学教授

川本 裕子

全日本空輸などが出資する格安航空会社（LCC）、ピーチ・アビエーション（大阪府泉佐野市）が3月1日に就航する。日本初の本格的なLCCで、まず関西国際空港と新千歳（北海道）、福岡を結ぶ2路線でスタートする。運賃は空席状況などに応じて変わり、関空―福岡便で片道3780～1万1780円という安さが最大の武器だ。

さらに、7月には日本航空などが出資するジェットスタ



## ▶国内線に格安航空が就航（1日）

# 低コストで市場拡大も

1・ジャパン（東京・千代田）、8月には全日空系のエアアジア・ジャパン（東京・港）も運航を始める。日本にもLCC時代が到来し、「ゲームのルール」が大きく変わることになるだろう。

消費者にとって選択肢が増えることは歓迎だ。新幹線や長距離バスなど、ほかの交通手段も含めた価格競争が激しくなる。企業にとっては厳しい時代になる。だが、国内航空路線の旅客数の低迷が続いている中で、これまで飛行機にほとんど乗ることがなかった人々がLCCを頻繁に利用するようになれば、航空市場の規模拡大にもつながる。

LCCは各種サービスを別料金にするほか、様々な工夫によって極限までコストを切り詰める。「航空サービスは交通サービスの中でも別格」と考えてきた従来の業界の概念自体を変える可能性も秘めている。